

## Vanity Fair の構成

—Becky Sharp の野心の行方

太 田 藤 一 郎

### 1

William Makepeace Thackeray が母につれられてイギリスに帰ってくる途中、St. Helena に上陸し、黒人の下僕と散歩した。そのとき、庭を散歩している Napoléon の姿をみた。「あれがボナパルトです。毎日羊を三匹と、小さい子供たちを捕えて食っているんです」と下僕が彼に説明した。6歳の少年にとっては、この話はまったく衝撃的な恐怖であったにちがいない。

現実的、行動的で、感情を解しない性格をもった土地コルシカ島に生れた Napoléon、少年時代の彼は、子供らしさがなく、貧窮のどん底にあって、どのように身を処していくかについての、状況の分析力と積極的行動性があった。彼は早くから金銭にたいする関心と、社会における名誉心を持っていた。時はまさに貴族の血が求められたフランス大革命の歴史的流血の舞台であった。Napoléon 26歳のとき、身の丈5尺4寸、瘦身。彼はインフレーションの状況の中で、やはり貧しさにくるしみ、眼だけがざらざら輝いていた。彼の特質は的確な判断と行動であり、彼は戦争遂行にあたってはみじんの人間性も示さなかった。イタリア遠征、オーストリア進撃、エジプト遠征——権力を求めて行動することが、彼をしてしだいにフランスの救世主にさせていった。ジャコバン議員たちを除名し、3名の臨時執政を任命して、彼自身もその一名となり、議会の指導権をにぎった。戦争、勝利、彼の野心がみたされた。人間性を軽蔑し、友情、愛を否定し

た彼はなにか悪魔的な不気味さを持っていた。ヨーロッパ大陸の征服者となり、皇帝 Bonaparte Napoléon となった彼は、権力を愛することのよろこびを側近者に語った。しかし、1810年よりの経済危機はその彼の権力をゆすりはじめた。1812年42万の兵を動かしてロシア遠征が企てられたが、冬服もなく、食糧もない彼の軍隊は、迫りくる冬將軍に敗れた。彼は敗北をみとめ、1814年エルバ島にのがれた。彼の没落とともに、ブルボン王朝の復活をみたが、フランス国内の経済的、政治的不安はおおいかくすことが出来なかった。状況をみるに敏なる彼は、1815年二月約1000名にも満たない兵士をつれて、エルバ島を脱出、フランス本国に上陸した。パリに入城した彼の百日天下の支配が始った。1815年六月 Waterloo の会戦。Wellington 將軍によって指揮されたイギリス軍と Napoléon 軍との戦いは、忍耐力と正確な射撃とによって、イギリス軍の勝利となり、Napoléon は退位、投降した。フランス皇帝として名誉と栄光にかざられた彼は、絶海の孤島 St. Helena におくられた。しかしながら、かつては100万のフランス人を犠牲にした彼ではあったが、フランス人が彼にたいして憎しみの感情を抱かなかつたのは何故なのだろうか。1821年癌で死亡した彼の遺体が、St. Helena からパリに移され、彼の国葬が報道された。

この Napoléon の生きざまをとおして、人間のおごりと生命のはかなさが、Thackeray の心を強くうった。Thackeray は、

“O vanitas vanitatum! Here is our Sovereign in all his glory,  
.....”<sup>1</sup>

と叫んでいる。Waterloo の会戦は、Thackeray が生れて4年目におこっている。この戦争は彼の後年の作品 *Vanity Fair* で、重要な役割を演じている。George Osborne は心臓を射たれて戦死、未亡人 Amelia は、夫 George の愛情を信じ、夫の遺児を養育しながら、15年間の青春を空費しなければならなかった。Amelia とは逆に、Becky にとっては、それは彼

女をさらに野心的にさせ、パリ、ロンドンの華麗な社交界に乗り出す大きな力を与えた運命の転回点ともなった。この Becky Sharp の非情な性格、行動性、権力や金銭と手を結ぼうとする彼女の野心——彼女の生きざまは、いかにも Napoléon の生きざまと類似している。そこに一世を風靡した大ペてん師の風貌を見るのである。

## 2

Becky Sharp の母は、フランス生れの歌劇女優であったが、Becky が五歳のときに死亡した。父はアルコール中毒にかかった貧乏画家であって、借金取りを口車にのせて撃退するのは、常にまだ年端もいかない彼女の役目であった。借金も払わないで、品物をさらにとどけさせるだけの手管があった。その意味において、彼女は早熟で、年わずか八歳にしてすでに大人の感覚を身につけていた。Dr. Johnson の学問的権威を利用して、金儲けをたくらんだ Miss Pinkerton 塾長の物欲心、権威崇拜の根性を嘲笑した Becky Sharp は、この女塾長のくれた人形を塾長に仕立て、人形芝居を演じて、父の友人達を愉快にさせた。父の死後、十七歳の時この女塾に引きとられ、その代償としてフランス語を教えることになる。フランス語を話し、母がフランス女性であったということは、反イギリス的なことであった。フランス語のわからない Pinkerton 女塾長にとっては、ことごとくにたてつく Becky Sharp に手を焼き、全く危険な小鳥を鳥籠に飼ったものだと悔んだのも無理からぬことであった。権威、社会的地位、富を求めようとする Becky Sharp は、反抗者、怪物、虻、扇動者であった。小柄で、痩せ、青白く、砂色の頭髪をした、いつも伏目がちの彼女は、われわれに Napoléon を連想させる。Becky Sharp にとっては、この女塾は牢獄であった。コルシカ島が Napoléon にとって、一つの限られた、閉鎖社会であったとおなじように、女塾は彼女の自由をうばった、満足できない世界であった。級友 Amelia Sedley の馬車に便乗してこの女塾を出た

とき、彼女は、“*Viva la France! Vive l'Empereur! Vive Bonaparte!*”と馬車の中で絶叫している。イギリス、フランスの情勢が緊迫していたこの時代に、フランス万歳、ボナパルト万歳と叫ぶことは、イギリス人としておそらく国賊的な言動であった。彼女のこの叫びは、彼女の自由を求め人間性を圧迫したこの女塾が、封建的社会組織であり、彼女に侮辱を与えた牢獄であったことを示すものである。広い社会に出ることは、自由を得ることを意味した。天涯の孤児として、社会に生きていくためには、彼女は自分の才覚を利用しなければならない。金銭にたいして貪欲でなければならない。貪欲 (avarice), これがコルシカの Napoléon の場合と同じように、Becky が人生を渡っていくための御守札となるのである。Napoléon が大砲を武器としてヨーロッパを征服していったように、彼女は生来の頭の良さ、お世辞を武器とした。まず最初の戦いは、インドから病氣療養のために帰英していた Amelia の兄 Joseph Sedley を攻撃の第一目標とした。白く装い、雪のように白い肩を露出して、Joseph の気を引いた。Becky Sharp の演ずる処女の無邪気な純潔さのうらに、黒い邪心がかくされていた。まさにそれは彼女が翼をはばたかして自由に飛立とうとする瞬間、羽化の瞬間なのである。

Napoleon appears in the English consciousness, carrying super-human or more-than-rational force.<sup>2</sup>

と言われるように、超人的、法外な力を具えてパリの都に乗りだしていく Napoléon のすがたが、イギリス人の意識の中にうけとめられ、株式仲買人である Amelia の父 Old Mr. Sedley を破産におとし入れるものとして、再映像され、この作品の局面を変える重要な要素となった。その意味において、Napoléon は Old Mr. Sedley にとっては大悪魔であり、陰謀の中心であった。Becky Sharp を支えているものはこの Napoléon 的な生命であり、血である。彼女は悪魔的な大胆さで、Joseph, Rawdon,

Old Miss Crawley, Lord Steyne などにたいして陰謀をたくましく展開し、多くの人達の犠牲の上にたつて、彼女の野望を達成していった。

Old Miss Crawley はフランスでの生活経験を持ち、フランスの小説、料理、ワインを愛し、ヴォルテールを読み、ルソーを諳記している。彼女は才人で、急進主義者で、離婚を軽視し、女性の権利を極端に力説した。彼女は金銭を餌にして、Becky, Mrs. Bute Crawley や Sir Pitt Crawley などに金取競争という虚虚実実の戦いをさせた。Old Miss Crawley にとっては、Napoléon はいきな急進主義的な男性であり、彼女と Napoléon の映像がそれぞれの戦いの指導的人物という線で重なりあう。Becky がフランスとかかわりを持ち、Old Miss Crawley もフランスとかかわりを持っている点においては、彼女等は一時的に共通の連帯感を持つことができた。しかし、氏素性を無視し、自由主義者らしく、Rawdon Crawley との駈落を Becky にそそのかしていたにもかかわらず、実は Becky が既に内密のうちに Rawdon と結婚していたことを打明けると、たちまち Old Miss Crawley は従来主義、主張を変え、Becky を遠ざける。金取競争という大戦争に勝利をおさめようとして、Old Miss Crawley 攻略に才覚をめぐらし、貞淑らしくよそおっていた Becky の作戦が失敗したと同じように、Old Miss Crawley のフランス的教養のめっきがたちまちはげてしまう。一般のイギリス人の眼には、金銭、社会的地位を尊敬し、愛情も良心もない女性は、異形の女に、狂暴な野蛮人としてうつった。

France is the land for the real Syren, with the woman's face and the dragon's claws.<sup>3</sup>

愛情を尊敬し、人間性をとおとぶ一般のイギリス人にとっては、フランスは女の顔と龍の爪を持った魔女の国なのであった。

名門の娘、金持の娘たちを集めて教育している Miss Pinkerton の女塾は、貴族社会の一変形であった。是等の娘たちに比べて、何倍も利口であ

った Becky にとっては、人間を差別し、人間の自由をみとめることを知らない、社会的地位、家だけで人間を価値づけようとするこの女塾は、牢獄に見えた。この女塾では、音楽、舞踊、書方、各種の刺しゅう、裁縫を学ぶことが、教養を身につけることであり、威厳のある態度、姿勢が上流階級の子女に必要であると考えた。こういう閉鎖的、独善的な社会、よどみきった社会の中で、世に出るなんの手蔓も持たなかった Becky Sharp の反骨精神と、Napoléon の最も有力な支持者たちが、*La carrière ouverte aux talents!* と叫んだ言葉には、互に相通ずるものがある。金持の独身青年 Joseph Sedley から、上流階級の青年将校 Rawdon Crawley へ、そして社交界の大立物である Lord Steyne へと、Becky の男性征服への戦いがつづく。敗れても、敗れても、挫折することなく、一戦毎に彼女の欲望の刃は鋭さをました。それは全く彼女が直面している階級の差別を充分に意識した上での、彼女の用意周到な知的作戦計画の実行であった。Napoléon がヨーロッパにたいして挑戦したように、彼女の目的を遂行するためには、また イギリス社会の階級組織に挑戦するためには、彼女は支配出来る知力と肉体とをじゅうぶんに活用しなければならないし、彼女の野心の正体にヴェールをかける必要もあった。戦塵に塗みれるにつれて、他人の生活を破壊してもかまわない。彼女の子供をさえ無視する利己主義が彼女に要求された。それと同じように皇帝の座につくためには Napoléon にも利己主義が要求された。彼の利己主義は、ヨーロッパ全土に戦争をひきおこして、ヨーロッパ人の生命を犠牲にするとともに、最後には彼の滅亡をまねくにいたった。

*Vanity Fair* の構成は、保守的で、おとなしく、男性の愛に支えられて生きていく、金持の娘 Amelia と、積極的で、利口な、そして女性であることを意識的に利用して男性の世界をかきみだそうとした奔放な Becky、この二人の女性の生き方が交錯し、あるいは分離していく。すなわち会戦という隠喩で語られる。第二章のタイトルは、‘MISS SHARP AND

MISS SEDLEY PREPARE TO OPEN THE CAMPAIGN.’ 第三章のタイトルは、‘REBECCA IS IN PRESENCE OF THE ENEMY.’ 第二十八章のタイトルは ‘AMELIA JOINS HER REGIMENT [AND] INVADES THE LOW COUNTRIES’ となっている。Napoléon の生涯は戦いの生涯であり、その戦場はヨーロッパ全土に及んだと同様に、この *Vanity Fair* では、戦場はイギリス社会であり、人間の弱点、虚栄、ぺてんがしのぎをけずる。何が弱点なのか、何が虚栄なのか、何がぺてんなのか。少年時代から愛を渴望し、やっと愛する妻を得て、その望みをとげたかに見えたが、三人目の女兒を生んだ彼の妻は産後の衰弱のために発狂した。Thackeray は家庭の不幸に沈潜して構想をねり、かきはじめられたのが *Vanity Fair* である。その頃には、彼にはすでに社会の悪をきびしくきめつける仕事にたずさわることが、作家の仕事であるという自覚ができていた。善人は馬鹿で、利口者は悪党である。町の金物屋の娘 Rose は、従男爵夫人におさまるために交際中の恋人をすて、友人たちとも絶交して、Sir Pitt Crawley の後妻となった。二人の女兒を生み、病気になる彼女の側には看取る者もなく、独りで横たわっている。これが花のかんばせあでやかに、その名も Rose。従男爵夫人になれることにあこがれて、あたら青春を犠牲にした女性のたどる皮肉なみちであった。彼女はお人好しで馬鹿である。そういう愚者の最たるもの、すなわち戦死した夫 George Osborne の愛情を信じて、15年の青春を空費した愚者の代表が Amelia である。またブラッセルズからパリにわたり、宝石商、服屋から品物を詐取し、ホテルの滞在費や、子供の養育費も支払わないで、イギリスに引挙げたぺてん師、それこそ一銭も使わないで一年をただで暮らす方法を実行した、ぺてん師の代表が Becky なのである。悪い性質に利口さが加わると、人間は意地悪く、おぞましくなる。Amelia が彼女の夫 George Osborne を誘惑する Becky の姿をみて、まるで悪魔にでも会ったようにぞっとおじけをふるったのも、このおぞましきである。

Cunning, low price, selfishness, envy, malice, and all uncharitableness, are scattered among them with impartial liberality.<sup>4</sup>

悪の Becky の方が、善の Amelia よりも、強烈な印象を与える。神に祈ることもなく、人間性の尊さを知ることもなく、愛することを忘れ、欲望、衝動にかられ、ただ物のうわべだけに心を捉えられている。彼女の利口さは、欲望の達成にのみむけられているにすぎない。これは19世紀イギリスの物質崇拜の社会文化がうみだした利口さである。平和な、愛に満ちた生活を創造しようとする方向性を見失った利口さである。Old Miss Crawley はまことに抜け目のない利己主義者であるし、Mrs. Bute Crawley は牧師の夫にかわって説教を書き、金儲けのためにお世辞を連発し、Old Miss Crawley と Becky との協調を破るための策を準備するのに恐ろしく熱心であった。Becky, Old Miss Crawley, Mrs. Bute Crawley は知力の女であり、Amelia は愛情の女であった。

Amelia も Becky もともにヒロインではない。けれども Becky の性格、生き方が、Amelia のそれに比べて、強い印象を与えるものであることは間違いない。それ故、Becky がこの作品の核になっていると言えるであろう。

The whole of Becky's career is a satire on English society.<sup>5</sup>

Becky の生涯は、物欲にとりつかれた19世紀のイギリス社会そのものの姿であり、彼女の生きざまが諷刺されることは、イギリス社会そのものにたいする諷刺につながるが故に、彼女により重要性がおかれていると言えよう。John Bunyan の寓意譚 *Pilgrim's Progress* において、神を見失いつつある17世紀の社会、それは‘破滅の町’である。この町の住人 Christian は、神の国にこそ永遠の生命があるとして、多くの困難をのりこえて、真実を求める旅を重ね、遂に神の国に到達した。それとは逆に、神を忘れ、社会的地位、名誉、富を追求して人生の迷路にふみ込み、次第に不幸にな



っていく19世紀の人達のすがたを、偽善、偽者の代表者 Becky の野心的、欲望的な生活をとおして描こうとした。その意味において、*Vanity Fair* は一種の道徳的寓話である。*Pilgrim's Progress* において、人間の欲望を満足させる虚栄の品物が売られ、町の人達は賭博に浮き身をやつしている寓意的な町 *Vanity Fair* の名前が借用されたのである。Thackeray は手紙の中で、社会の道徳的状態を描写することを目的としていることを明かにしている。Becky は恥知らずの毒婦 Jezebel に他ならない。彼女は我が子に愛情を抱かない。これは極めて不道徳で、いやなことである。彼女のこの不道徳さ、虚栄心が諷刺され、彼女は諷刺の中心となる。したがってこの作品では、善人よりも悪人の方が重要な意義を持っている。

Becky Sharp and Rawdon Crawley are the real heroine and hero of the story.<sup>6</sup>

Sir Pitt Crawley は厚顔無知、Old Miss Crawley は意地悪で、俗気があり、快楽を愛する女。Bute Crawley 牧師夫婦は信心ぶった俗物である。Becky はこれらの人物達と刃を交えわたり合う。Becky にねらわれた Joseph Sedley は、肥大漢で、内気で、ぶざまな飲んだけれである。彼のこのような性格は、Becky にとってはこれ以上のものを求める必要がないのである。彼は金さえ持っていればよい。彼のこの金が最後までものを言う。Rawdon との結婚も、彼が Old Miss Crawley から貰える予定であった金目当のものであった。そのために彼女は自分の魅力を、機知を、嘘言を武器として使った。彼女は情に負けなかった。情におぼれる人達を軽蔑した。

‘...to be weak is to be miserable!’<sup>7</sup>

この言葉が彼女の行動を支える命綱となる。革命的な社会状況のなかで果敢に行動する Napoléon も、みじんの人間愛も示さず、征服が彼の現在をつ

くり、戦争から戦争へと歩んだ。Becky も恥かしさを感じなかった。人間を憶病にさせるところの良心なるものを持たなかった。

Thackeray leaves the question of whether or not Becky committed adultery with Lord Steyne unsettled, ...<sup>8</sup>

Becky が Lord Steyne と不貞を犯したかどうかについては、読者の判断にまかされているし、彼女が大陸放浪時代の生活についても、作者は殆んど口をつぐんでいるが、反道徳的な生活をやったことは、充分に察しがつく。

Thackeray は社会で立身出世しようとしている人達を嘲笑しているし、また立身出世しようなどとは思わないと言っている人達をも嘲笑する。

He mocks the emptiness of high society, and mocks Becky when her ambitions sink so low as to be content with Bohemianism.<sup>9</sup>

無意味さにふりまわされることを彼は嘲笑する。Becky はドイツ滞在中、賭博場に出没している。緑色の目をかがやかし、巧妙に相手をペテンにかけ、優れた手管を弄する女性である。したがって、心やさしい愚かな Amelia や、うぬぼれ屋の、虚栄心の強い Joseph などは、彼女のぺてん、手管によって容易に喰物にされてしまうのである。二人には Becky の本心を見抜くだけの充実した中味、識見がない。Thackeray は Becky をわらい、Amelia をわらい、Joseph をわらう。彼はありもしない血統を自慢にしている連中を嫌悪する。この嫌悪の感情を表現する手段として、逆にもっともしい血統を自慢したり、上流階級の人達に伍することを名誉と心得、その中に生きようとする俗物たち、多くの偽者を描くのである。Mrs. Bute は世話をするとみせかけて、Old Miss Crawley を病室にとじこめて、逆に重病に仕立て、Becky の接触をたち切ってしまう。Amelia は、生活の貧しさ、母性愛、宗教心によって、心が清められ、真正の世界には

いる。Becky は思い上がり、利己主義、俗臭紛紛、そのために、作者は Becky に偽せのからを身につけさせ、偽せの世界におくりこむ。機知以外になにもたよるものを持たない Becky が、ロンドンの上流階級にむかえられる境遇にまでなるためには、彼女の祖先は貴族 Montmorency だったという作り話も考えたし、亡命フランス貴族の娘だと偽る必要もあった。辛みじめな生活から脱するためには、彼女には金目当の結婚しかなかった。Joseph の金、伯母からもらえるであろう Rawdon の金を目当てとし、彼女に結婚を申し込んだ Sir Pitt Crawley の社会的威信のほうはみすてられた。

金目当の戦いは最後まで展開する。Joseph は Aix-la-Chapelle で死ぬ。彼の金は全部生命保険の方にまわされ、生命保険だけがのこったが、病氣中、立派に看病してくれた Becky をその保険金の受取人に指定している。しかしこの場合、彼女が立派に彼を看病したとは到底考えられない。保険会社の弁護士は、かつて見ない兇悪なる件だと述べ、調査員を Aix-la-Chapelle に派遣して Joseph の死亡状況を調査させ、保険金の支払を拒否した。Becky は彼女の依頼した弁護士の働きにより、結局金の支払をうけた。彼女は利口で、深慮遠謀であった。この事件の真相については、作者 Thackeray は笑いながら、判らないと答えている。Joseph 自身は彼女によって殺されるのではないかとおそれていたようである。

Becky is evidently slowly poisoning the unhappy invalid, now quite in her power, and justifies his words to Dobbin that she would kill him, if she knew of their conversation, which she hears unknown to them, while carefully concealed. Jos Sedley dies a few months after this dreadful scene.<sup>10</sup>

Canning は、Joseph が Becky によって毒殺されたという判断を下している。Becky は Amelia や Dobbin のいない時には、Joseph をどのよ

うに料理しようと、彼女の意のままであったという事実がある。

## 3

Her worst crime was the neglect of little Rawdon.<sup>11</sup>

我子にたいして母親としての愛情を持たなかった Becky には、女性としての存在が許されるか、許されないかという重要な意味がとわれる。あえてこういう Becky を作者が創造したということは、形の上では母親であっても、実際には母親ではない、すなわち母親の偽せものを作りたかったのである。少年 Thackeray に非常なショックを与えた St. Helena での Napoléon にたいする怖れと関心が、Thackeray をして、Becky の偽せの世界をつくらせ、彼女の演ずる偽せの世界を追わせた。彼女は彼女自身の利益のために戦わねばならない。彼女は幸運にたいしても、悪運にたいしてもわらった。彼女は天使ではないということを認めるだけの正直さがあった。皇帝 Napoléon は失墜した。Becky も当然失墜するはずであった。なぜなら、彼女も考えられるあらゆる悪さを犯している。彼女の夫を辱しめ、友をうらぎり、自らをも墮落させ、ついには殺人すら犯しているらしいのである。社会への門出において、彼女は Joseph を射止めそこなった。それは彼が飲みすぎた rack punch のためであった。作品の最後において、ヨーロッパ各地を放浪していた女やくざ Becky は、騒音、煙草の煙、ビールのしみついた安下宿生活を送り、貧乏学生相手の自墮落な生活を送っていた。それがなんとエレファント・ホテル、ここで象のような図体の Joseph が、小柄な Becky のはりめぐらした巢にひっかかった。彼女の部屋を訪れたとき、とっさに寝台の中にかくされたブランディの壺に、彼は気がつかなかった。彼女が哀れげに語る Rawdon との離婚後の哀話——勿論彼女の作り話であるが——のとりこになってしまった。酒にまつわる Becky, Joseph それぞれの皮肉な運命である。

Joseph の生命保険金のうち、1000ポンドをにぎった彼女は、大陸から帰英、バース、チェルトナムあたりで、教会に通い、敬虔な仕事に従事する。たまたま、Dobbin や Amelia などに出会ったとき、彼女は極り悪げに眼を伏せた。戦いに一生をささげた Napoléon は沈んだ。彼がエルバ島を脱出してフランスに上陸したという報せは、イギリス軍の連隊長から一兵卒に至るまで、大いによろこばした。彼等は戦功をたてることによって、年金が与えられるからである。しかし、戦争とは、一、二名の將軍の名声が国内でおちたとき、名誉恢復のために何か事をかまえて国と国とが起す大賭博であり、その数名の名誉のために、多くの男性が尊い生命を犠牲にし、女性は悲しみの涙を流すのである、と Thackeray は戦争の実態を明かにし、Napoléon の生涯を批判している。Becky の生涯も多くの人達を犠牲にした、一種の戦争とも言える。けれども、イギリスの田舎に身をひそめ社会事業に首をつっこんだ Becky にたいする作者のこの処遇は、一体どう解釈すべきなのであろうか。この皮肉な取扱は、Thackeray の深い人間愛によるのである。

The object of Thackeray was not destruction, but correction; . . . <sup>12</sup>

ここに指摘されているように、Thackeray の目的は Becky を破壊しざることではなくて、彼女のあやまりを正し、救済することにある。彼は革命主義的政治俗物も、保守主義的政治俗物をも、ともにわらった。そしてわれわれの社会がもっと単純に、寛大に、平等になることを望んだ。

Rank and precedence, forsooth! The table of ranks and degrees is a lie, and should be flung into the fire. <sup>13</sup>

Thackeray は、貴族名鑑録を有難がる俗物社会が消滅し、無力な人達の上に愛情の光がさしそえられる社会、貴族であることや富裕なることを誇にせず、また貧乏であることを卑下しないで生活をたのしめる社会の出現

を望んだ。少年時代から愛情に飢えた彼は、おかしさはよいものだし、真実は更に結構なものであるが、それらのものに比べて、最上のもは愛情であるという信念を持ったのである。神は愛なり、しかも神の愛は無限りと言う。Thackeray の愛は神の愛に及ばないけれども、愛を最上のもとのみ、それにしたがひ、それをこの世にひろめることが、神にたいする忠実なしもべのとるべき道であり、人間としての道であると信じた。彼は利己主義の生み出す人情の稀薄さをわらった。Becky が緑 (green——だますという意味がある) の絹財布を編んで、Joseph の歓心を得ようとした。召使たちの印象をよくして、Sir Pitt Crawley 家での実権を握ろうとした。Old Miss Crawley に才能のある進歩的な女性であることを示した。また我が子に接吻して母性愛の深い母親であることを上流夫人たちに披瀝するが、「いつもお母さんがこのようであればよいのに」、とすぐに子供から化の皮がはがされてしまった。これは金儲けや社交界に乗り出そうとする彼女の利己主義に他ならない。

Napoléon は利己主義のために破滅したのであるが、彼の利己主義から Thackeray が教えられたことは、われわれは決して自らの利害や野心に身をまかしてはならない、われわれの利害とともに他人の利害をもあわせ考えるべきであるということである。それ故彼は Becky の利己主義によって彼女が破滅してしまうという結末を避け、他人のために奉仕するとうように訂正している。彼女はイギリスの田舎で社会事業らしきものにつつまこみ、余生を送るように彼女の利己主義のあやまりは訂正された。これは利己主義者を徹底的にやっつけるのではなく、救済しようとする Thackeray の温情によるものである。しかし彼女のこの結末はそれだけに却って彼女にとって最もぴったりの永遠の報復でもある。彼女にとってまことに面映い限りなのである。

Man is a Drama——of Wonder and Passion, and Mystery and

Meanness, and Beauty and Truthfulness, and Etcetera. Each Bosom is a Booth in Vanity Fair.<sup>14</sup>

ここに言われているように、Becky は ‘a drama of meanness’ なのであった。彼女の結末は、‘poetic justice’ という点からすると、不十分なものとなっていることは否定できない。けれども、かつては、男の世界をかきみだした彼女の容色もおとろえ、いまでは入れ歯 (false teeth) をはめ、かつら (false hair) をつけ、笑えばぞっとする顔付である。あわれ、偽せの世界に身をさらす Becky, こういう結末の持っていきかたに、彼女の野心にたいする作者のアイロニイがあるのではなからうか。

Ah! *Vanitas Vanitatum!* Which of us is happy in this world? Which of us has his desire? or, having it, is satisfied?<sup>15</sup>

#### 注

- 1 H. N. Wethered, *On the Art of Thackeray* (London: Longmans, Green and Co., 1977), p. 18.
- 2 Avron Fleishman, *Fiction and the Ways of Knowing* (Austin & London: University of Texas Press, 1978), p. 55.
- 3 Elizabeth Rigby, “*Vanity Fair—and Jane Eyre,*” *Quarterly Review* (December, 1848); reproduced in *Thackeray: The Critical Heritage*, eds. Geoffrey Tillotson & Donald Hawes (London: Routledge & Kegan Paul, 1968), p. 85.
- 4 *Ibid.*, p. 63.
- 5 James Hannay, *Satires on Thackeray* (Port Washington: Kennikat Press, 1970), p. 47.
- 6 Anthony Trollope, *Thackeray* (London: Macmillan & Co., 1968), p. 93.
- 7 Geoffrey Tillotson and Donald Hawes (eds.) *op. cit.*, p. 82.
- 8 Ioan M. Williams, *Thackeray* (London: Evans Brothers Limited, 1968), p. 62.
- 9 Jack P. Rawlins, *Thackeray's Novels* (Berkeley: University of California Press, 1974), p. 23.
- 10 A. S. G. Canning, *Dickens & Thackeray Studied in Three Novels* (New York: Kennikat Press, Inc., 1967), p. 308.

- 11 H. N. Wethered, *op. cit.*, p. 109.
- 12 James Hannay, *op. cit.*, p. 53.
- 13 W. M. Thackeray, *The Book of Snobs* (New York: Charles Scribner's Sons, 1911), p. 263.
- 14 *Ibid.*, p. 224.
- 15 W. M. Thackeray, *Vanity Fair* (New York: The Modern Library, 1950), p. 730.